

教育の充実について



ゆとりの時代

「ワンパクでもいい、たくましく育ってほしい……」
 今から一昔前に流行ったこのハムのCMのフレーズは、今では懐かしい響きとなつてしまいました。
 戦後の厳しい時代を過ごしてきた保護者達の、当時の子育ての願いは、『よく食べ・よく遊び・よく学ぶ』それがゆとりある時代の教育の基本であったのではないのでしょうか。

ゆとりがなくなってきた時代

欲しくてもなかなか手に入らない、我慢する、工夫して何かを得るといふ耐える時代から、お金をかせばなんでも手に入るというバブルの豊かな時代へと社会的気風が変化しました。
 勝ち残り、より上の豊かさを求める傾向が強くなり、教育においても、成績至上主義、親の過干渉や学業専念の社会環境が重いとなり、子どもたちの遊び（ゆとり）時間は縮小されてきました。
 「ゆとり」のない時代に育った、自己中心的、無関心短絡的な一部の親は、目を見張るような事件や虐待をおこし、子どもたちの更なる危機をもたらしています。子どもたちの受難の時代到来です。

わが町の子どもたち

わが町においては、情報化の推進により都市との格差は減少しつつありますが、依然、過疎化・少子化・核家族化は進み、子どもたちを取り巻く環境は厳しくなつてきています。

昭和六十年には吉野小学校だけでも五百二十五人の児童がおり、町内六校で千七百七十九人の児童がいました。

その十二年後の平成九年には七百十六人に減少し、平成十九年の現在では統廃合後の二校で三百四十七人となり、さらに減少を続けています。

廃校舎の増加

計画性のない小学校の改築や新築により、ここ数年で十数億の建設費が使われてきました。しかし、結果的には廃校となり、町に大きな負債を生む結果となつてしまいました。



経営的センスの行政運営

廃校舎を放置すれば、老朽化がさらに進み荒廃と処分費が増えるだけです。そこで、学校法人や、企業を誘致して債権を有効利用するとともに、新たな発想をもった経営感覚のある人を外から招く必要があると考えます。それらによって、新たな雇用の創出も生まれるのではないのでしょうか。

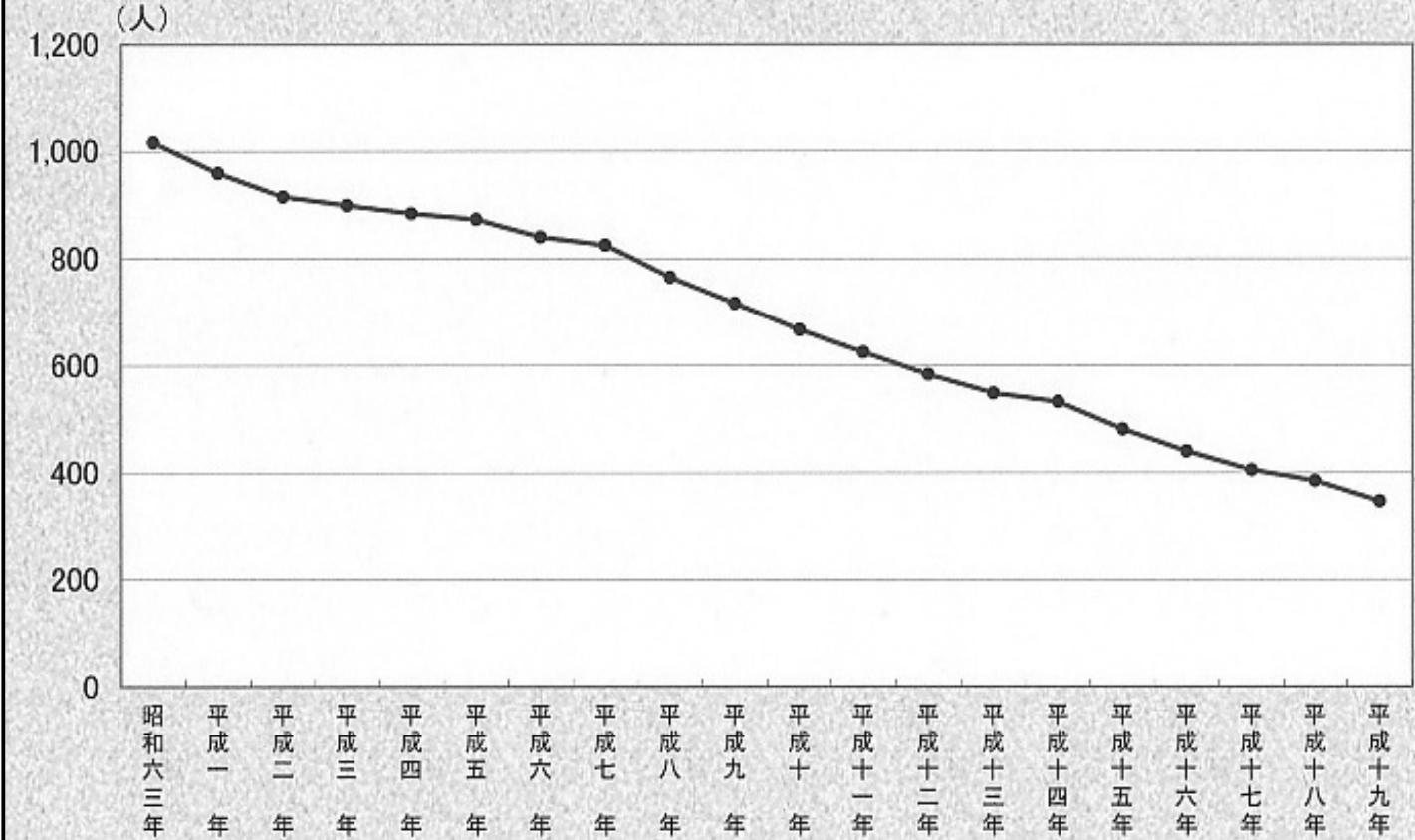
公民館や集会所を地域の活動拠点に



町内には五十箇所にも及ぶ公民館や研修会館・集会所などがあります。人々が集い語り遊び学ぶ場であり、地域の活動の拠点となっております。

人生経験豊かな高齢者は、余暇を使って、幼い子どもたちに知恵や技術を教えます。子どもたちはふだん家庭や学校では習わないような生活の知恵を学んでいきます。

児童数の推移(過去20年)



女性は、余暇を活かし、趣味や娯楽、また子育ての情報交換・交流の場として活用します。人が集えば、子どもたちの安心安全な遊びの場として、身近な集会所や公民館が活用できなくなるはずはです。
 このように地域の拠点として、積極的に活用するよう推進していく必要があります。

国際化教育の推進

わが町は、平成十七年に「紀伊山地の豊場と参詣道」の世界遺産の拠点地域の一つに登録されました。わずかずつではあります外国観光客も増加しています。

こどもから大人まで、全世代を対象とした国際化教育(語学や文化、料理やマナーなど)にもっと関心を持って取り組む必要があると考えます。

例えば、英語、中国語、フランス語などの外国語や文化を学ぶことは、子どもたちの国際的な感覚を身につける絶好の機会になるのではないのでしょうか。